



第 45 回 「出家的人生のすすめ」の言葉

佐々木閑著「出家的人生のすすめ」(集英社新書 0797、集英社、2015 年 8 月)の著者は工学部の出身ですが、現在は仏教哲学、古代インド仏教学の教育研究に携わっています。

私は長年にわたり実験を通じてドレスト光子の生成と応用を研究してきましたが、大学定年後はドレスト光子とは何か?を説明する基礎理論を作りたいと考えました。すなわち実験から理論へと、別の価値を見出すための転換を図ったのです。ちょうどそのころ本書を読む機会がありましたが、本書によりこの転換が「出家的な転換」であることに気づきました。私はこの転換のために一般社団法人「ドレスト光子研究起点」を設立しました。そしてその運営の方法について模索する際、本書はその方向が適切かどうかを確認するのに役に立ちました。そして設立から 5 年たった今、再び本書を読んで運営の方法が的外れではなかったことを確認することができました。以上の経緯をもとにここでは本書の中から忘れえぬ言葉を拾い出してみます。

第 1~3 章では出家とは決して世捨て人となる行為ではなく、世俗の暮らしでは手に入れることのできない特別なものを求めて別の価値観で生きる世界へと飛び込むことであると説明しています。さらに出家とは仏教のみでなく社会のあらゆる局面にみられる普遍的な行為であること、すなわち一般社会の中に身を置き社会と密接に関係しながら、社会の通念を脱して独自の価値観で我が道を歩んで行くことであると指摘しています。本書では出家と科学者との関係を一貫して論じているので、これを科学者の場合に当てはめ、科学者は真理の発見を一番の喜びとし研究に没頭している人なので、その世界に身を置くことは出家の考え方に通ずると指摘しています。なお私も科学研究に携わっているので、そのような私から見ると、本書はきわめて当然のことを書いているのです。しかし出家ということばで仏教と科学者との接点を表す発想は興味深いものです。これを可能にしたのは著者が理系出身だからなのでしょう。

第 4 章ではいよいよ出家と科学の関係を説明し、**第 5 章**以下では出家としての二つの条件を、科学者の場合に当てはめて記しています。まず第一の条件は、出家になるには修行が必要であることです。さらに、修行を経て悟りに達すると、その経験を後進に伝えることができますが、これは自身の後ろ姿を見せて教育することであると指摘しています。科学者の場合には、独創的な研究をした先輩が自分の体験を後輩に伝えることです。ここで著者は、最近ではその道を本当に歩んだことのないニセ科学者が金や権威のためだけに教育する風潮が現れてきていると憂えています。ごもっともと言わざるを得ません。

さて、出家には生活力がありません。やりたいことだけをしているからです。そこで支援者がお布施を与えてその生活を支えることになります。しかし社会がそのような出家を許容する多様性をもっていなければ支援者は現れません。科学と技術についていえば、日本では明治維新以来、社会が一体となって西欧に追いつくことを考えていたので、そこには多様性の入り込む余裕がなかったそうです。従って布施の意味を理解する余裕がなく、出家的生き方を許さない社会でした。著者はこの状況を出家が本来ならば提供するはずの多様性をつぶす社会と表しています。

出家しているからこそ、世俗の枠に縛られず自己の力を思い切り発揮し、新たな世界を切り開いて社会を変革するパワーの源になるのです。科学者にあてはめれば、西欧に追いつくことばかりを考えていたのでは不可能な、革新的な発見・発明を生む可能性に相当しています。これまでの日本の社会では皆が同じ価値観と同じ能力を持ち、足並みをそろえて進んでいくのが理想の在り方であり、その流れに従わないものは社会的不適合者として排除するという見解が大勢を占めていました。従って出家的生き方はかなわない夢だったそうです。そのような多様性のない、変り者を大切にしない社会は結局、新たなイノベーションを起こす力がないので、淀みの中で地盤沈下していきます。私の研究に近い分野でも日本では全員で追いつけ追い越せの技術開発をしていました。例えば電子デバイス、光デバイスは同じようなものを皆揃って作るのがよいとされていました。しかし今やそのような技術の地盤沈下は顕著です。

さて、多様性が許容され支援が得られるようになった場合、出家には第二の条件が必要になります。それは支援者（社会）に対する義務を果たすことだそうです。自分を養ってくれる人には常に感謝と尊敬の念を表さねばなりません。私の場合、支援してくださるのはある企業の経営陣です。この企業の事業内容とは直接関係のないドレスト光子研究を許容し、私にお布施をくださっているのです。この方々に対する責任を正しく理解し、責任ある行動をとっていきたいと思います。

出家的に生きようとすれば、支援者（社会）との間にゆるぎない信頼関係を作らなければならないことから、上記の第二の条件は支援者（社会）に対し責任が生ずることを意味しています。本書ではその責任を果たすには自分たちの活動を完全に開示することだと指摘しています。寺が24時間いつでも門を開けているのは出家が修行する様子を開示するためだそうです。これを科学者にあてはめると、研究成果を絶えず発表すること、すなわち絶えず論文として発表することです。なお私自身は、論文は支援者（社会）に対して責任を果たすためだけにあるのではないと考えています。どんなに独創的な研究でも過去の研究者の研究成果を何等かの形で参考にしているものです。すなわち先達の研究遺産を受けて自分の研究を進めています。であるならば、自分の研究成果は論文の形で発表し、これを後進に対する遺産として引き継いでいかなければなりません。すなわち論文は知的遺産の継承のために必ず書かなければならないのです。

貴賤貧富や権威肩書が幅をきかず世俗社会に背を向け、自分が決めた道だけを真っ直ぐに歩いていくと決めて出家の手本を示したのが釈迦ですが、これを科学者にあてはめると、流行を追う研究姿勢に背を向け、独創的な研究の道を歩いていくのが望ましい姿ということになります。その場合、一つの大発見をした後にも探求の旅がさらに続くので、科学者は人生の最後まで修行者であり続けなければならず、終着点はないと指摘しています。私自身がこれまで歩んできた研究の道はこの指摘と矛盾しないと思っています。すなわち私が30年以上前に近接場光学という観点で始めた基礎研究はその後ナノフォトニクスと名付けた応用研究へと発展しました。それがさらに進むとドレスト光子の素性を探る基礎研究へとシフトし、それが当法人の研究活動へとつながっています。そしてドレスト光子とは何か？を探るうちにオフシェル科学という新しい基礎科学の道が開けました。今後も修行者として独創的研究を探求していきます。

第6章では科学者のほとんどが自分自身を出家した人間とは思わず、研究成果に対し報酬を受ける労働者と思っている人が多いと指摘しています。科学者は真理探究という個人的目的のために一切の仕事を放棄し、社会的には何の役にも立たない立場に身を置きながらも、誠実な研究生活を送ることで世間からの恩恵にす

がって生きていく完全な社会依存者であると自覚すべき、と警告しています。研究成果に対する報酬で生きていく科学屋というのは出家の道から逸れていき、真理の探究よりも世間に対する業績のアピールの方が優先されるようになるからだと思います。そうなると研究論文の数、論文のインパクトファクターといった数値で研究の価値を評価するような、世知辛いことになってしまいます。現在そのような傾向が見られるのが残念ですが。